

---

# 君はいつまでも空高く

優

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

君はいつまでも空高く

### 【Nコード】

N6775M

### 【作者名】

優

### 【あらすじ】

これが僕の運命を変える出会いになるなんてこのときは、思いもしなかった。周りも自分も大人になってしまった僕が出会ったのは、8つ年下の女の子だった。

季節が傾き、半袖ではうつすら寒くなり始めたある日。

僕は、バス亭にいた。

仕事の都合で、都会から少し外れた町に来ていて、今から帰るところだ。

時刻表を確認したところ、まだバスは来ないらしい。

僕はスーツの内ポケットから携帯を取り出した。

メールボックスを見たり、アプリを開いたりしたが、すぐに飽きてしまった。

少しぼんやりとしていたら、ガラガラと荷物を引く音が聞こえてきた。

辺りを見渡すと、誰かがこちらに向かってきている。

シルエツト的には女の子のようだ。

大きなスニーカーに、スポーツバッグ。

これからどこかへ行くのだろうか。

僕はぼんやりとしたまま、彼女がこちらに来るのを眺めていた。

彼女が僕の隣で止まる。

十代後半から二十代前半といったところだろう。

少しつけすぎた頬の化粧がなんとなく幼さを演出しているように見える。

「あの…何か？」

しまった。見すぎていたようだ。  
僕は謝った。

「あ、ごめん。あまりにも荷物がたくさんあるから。」

彼女は自分の荷物に視線を落としてから、僕の方を見た。

「私、これから上京するんです。」  
「へー。」

彼女は僕をじっと見ている。  
なんとなく気まずいので、僕は話題を作った。

「今、いくつ？」  
「20歳です。」  
「お、若いね。」  
「え？じゃあ、あなたは？」  
「僕は28だよ。」  
「え？もつと若く見えますね。」  
「そう？」  
「はい。」

会話が途切れてしまった。

しかし、彼女から続きの言葉は出てこない。  
時計をちらりと見ると、あと5分くらい時間がある。  
少し話してしまった後の5分はなんとなくそわそわするものだ。  
僕は思い切って、もう一度話しかける。

「君は仕事をしに上京するの？」

彼女は僕の方を見上げた。  
そしてにこりと笑う。

「そうですよ。」

「そっか。」

「今まで地元にいたんですけど、これからは都会で頑張るんです。」

まだ僕より若いせいだろうか。

それとも、夢を持っているからだろうか。

輝きのある笑顔だった。

「いいね、若いつて。」

「何言ってるんです。十分若いじゃないですか。」

「いやいや。僕はもう若くないよ。」

彼女は首を傾げた。

僕は微笑む。

まだ若い彼女にはわからないだろう。

僕のように、見た目よりも早く気持ちが年をとる感覚を。

「あ、バス来ますよ。」

「ほんとうだ。」

バスが止まる。

僕は彼女のスニーカーを持ってバスに乗りこんだ。

「あつ、いいですよ！」

少し重いが、苦になる重さでもなかった。  
僕は 立ちすくむ彼女に手招きをした。

「大丈夫だよ。ほら、君も早く乗りな？」  
「すいません、ありがとうございます。」

彼女はそう言っ、僕に続いてバスに乗り込んだ。  
車内には、僕らしいない。

「せっかくですし、まだお話しませんか？」  
「そうだね。」

僕らはお互いに近い席に座った。

「あの…お仕事は何をされてるんですか？」  
「ん……説明するの難しいなあ」  
「サービス業ですよね？」

彼女はスーツを見ながら首を傾げる。  
サラリーマンとかを連想していたのだろうか。  
僕は少し考えてから答えた。

「まあ、簡単に言えばそんなかんじ。」  
「へえ。」

「でも、もう少し言っ、と芸術関係。」  
「芸術？素敵！」

「ありがと。とは言っても、僕が何かを作るわけじゃないんだ」  
「どういっことですか？」

「僕は芸術家をサポート……って言えばかつこいいかな？」  
「へー。面白そうなお仕事！」

彼女は楽しそうに話を聞いてくれている。  
なんだか、くすぐったい気持ちになった。  
大人になった僕の周りにはこんな反応はない。  
すごく新鮮だ。

「じゃあ、僕も聞いていいかな？」

「はい。どうぞ！」

「上京して、どんなお仕事するの？」

彼女は少し恥ずかしそうにした。  
何を言い出すつもりなのか。

「えっと……実は私、大学に通いながらいろんな仕事やってて。」

「すごいね。例えば？」

「イラスト描いたり、ネイルアートやったり……細かい作業得意なんです。」

細かい作業と聞いて、僕は身を乗り出した。

「へー！それは僕の仕事柄気になるな。」

「そんな…プロとかじゃないですから。」

「いやでも、それで仕事ができるって立派だと思うよ？」

「そ、そうですか？」

彼女はかなり照れているようで、頬に手を当てた。

幼くて、可愛らしいしぐさだ。

僕は彼女の荷物を指して言った。

「作品とかないの？」

「えっと……中にはありますけど……今は出せないです。」

「そりゃそうか！」

僕は当たり前前の答えに笑った。

そして、名刺を差し出す。

「はい、これ。」

「え？名刺……ですか？」

「そう。気が向いたら連絡してよ。作品見に行くから。」

「えっ！いいんですか？」

ぱあっと彼女の顔が輝いた。

この子は表情が豊かだ。

ころころと顔が変わる。

「もちろん。あ、よかったらでいいんだよ？」

「あ、はい。ありがとうございます！」

彼女は僕の名刺を大切そうにしまってくれた。

財布のポケットに入れると、彼女から満面の笑みがこぼれた。

「絶対、連絡します。」

僕は少し照れてしまった。

あまりにも純粋な人に、僕は免疫がないようだ。

そして、これが僕の運命を変える出会いになるなんてこのときは、



思いもしなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6775m/>

---

君はいつまでも空高く

2010年10月10日06時53分発行